



日本プロレタリア文学集・37

プロレタリア戯曲集 3

日本プロレタリア文学集・37

プロレタリア戯曲集 (三)

定価 二八〇〇円

一九八八年七月三十日 初版 ©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六
電話 (〇三三) 四二二一八四〇二 (営業)
(〇三三) 四二二一九三三三 (編集)
振替 東京 三一一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN 4-406-01650-3 C 0393

日本プロレタリア文学集・37

プロレタリア戯曲集

(三)

目次

島 公靖

プロ床……………九

青いユニフォーム……………一九

伊藤貞助

売られる田地……………二五

堺誠一郎

爆 発……………二七

吉村浩太郎

プロレタリアートの途……………九三

立野信之

小作人……………二五

久保 栄

ファッショ人形……………一五

五稜郭血書……………一七〇

大沢幹夫

機関庫……………二九

中村栄二

あいつを倒せ……………三三

牧本 進

遺 族……………三六

合 作

逆立つレール……………戸川静子・佐々木孝丸・久保 栄・藤田満雄…三三

解 説……………菅井幸雄…四五

発表年月日と掲載文献……………四七五

島

公

靖

プロ床（一幕）

——移動演芸団用喜劇——

上演に際して、その性質と人数と時期によって唄や或る部分の言葉や衣装はいろいろにかえられるなければならない。小公演程度でやるのだったら、唄はおはやしをつけてかげでやる方がいい。

人物

床屋

貧相な男

元氣な男

傲慢な男

簡単な床屋のこしらえ。看板に『プロ床、一人五銭

也』

床屋（赤い上っ張りを着て）ええ、皆さん。今日はようこそお集り下さいました。私は御覽の通り床屋で御座いますが、まあ此節の床屋なんて申しますと、第一こうきれいに髪の毛を揃えて呉れまして、ピカピカと油でいためつけ、若い女の子か何んかが、グイッとこう腕まくりしまして、ハイお爪をなんてやりましてね、おまけに帰りには靴まで磨いてくれようと云う、見た所では大層便利の様では御座いますが、まあ我々にはえん遠う御座います。それで一両がとことられちまってフラフラになつて帰って行く。まあ来る方も来る方だが、やる方もやる方で、イデオロギーが低下でして、至極感心できない仕組で御座います、ええ、まあ、そう云うわけで、さてここに生れましたのが即ちこれなるプロ床屋。此の床屋さん、一朝事あるとの報を受け取りますや否や、何処へなりとも出勤いたします。今日も今日とて、この通り××工場（又は、××車庫等）の前まで出かけて店を張りましたが、此の床屋いかにして、ストライキを助ける事が出来るかと云う。えへん、プロ床屋のプロ床屋たる所以のもの、お慰みまでにゆるゆると御見物の程を願ひ上

げます。まずは其為口上左様！（とにぎやかにおはやしを打ち上げる）

貧相な男が出て来る。何処か探すのと見えてキョロキョロと地図と首っ引きで。

貧相な男（床屋を見つけて）もしもし、一寸物をうかがいますが、××という工場へ行くのにはどう行ったらいいんで？

床屋（始めから此の男に眼をつけていたが、サテハと云う思い入れで）ナニ、××工場？ うん、そうか、それはな、道がこみ入っているから、始めての人にはちょっとやそつと云ったって判りやしません。まあ、こっちへお入んなせい。え？ ゆっくり得心の行く様に、（煙管を構えて）さあ、お話をいたしやしよう。（とにらむ。男は変な顔をしながら、オズオズと入って来る）さあ、おいでなさい。所で、あの工場は今、ストライキをやっているって事をお前承知かね？

貧相な男 ええ、実は今朝新聞で職工募集の広告を見てね。何分どうも不景気で。

床屋 こいつ、スキップ野郎め！

貧相な男 え？

床屋 なに、まあ、（と椅子を指して）スキヤリなせえと云う事よ。

貧相な男 ええ？

床屋 と、これだけじゃ判るめえが、××って所はひどくきれいな工場でね、お前見てえな無精面じゃ、頼みに行っても、とうてい駄目で、使ってくれる所か、どうしてどうして門前ばらいが関の山さ。だから悪い事はいわねえんで、そのひげを剃ってやろうって事なのさ。

貧相な男 それじゃ此のひげ面では。

床屋（うそぶいて）まあ、使っちゃあくれないね。

貧相な男 そいつはいい事をきかして呉れた。じゃ一つ親方頼みますよ。まだ十五六銭はあらあな（と腰かける）床屋 アイサ、心得たよ。いいともよ。金はいらねえ。金はいらねえよ。好きこのんでこんな所に店を張ってるんじゃねえんだ。その変り何だぜ、性根の剃りなおしだから、少しは荒いかも知れねえぜ。

貧相な男 只なら少しは切ったってかまわねえよ。

此の間に床屋は道具をならべて、剃刀をといだり色色する。

床屋 所でお前、アカって事を知っているかね。よく、ほれ、アカイって云う、あのアカよ。

貧相な男 アカア？ 赤か、親方何んでそんな上っ張りしてるのか知らねえが、衛生的なものかね。

床屋 (傍白) えんの違そうな野郎だな。所でお前、五月の一日、五月一日にはそれ行列があらなあ、あの行列の……

貧相な男 (言葉をうばって) 行列？ 二月の十一日だろう？ ケンコクサイじゃねえか。

床屋 アレ、あんな事を云ってやがる。

貧相な男 親方、話ばかりしていねえで、早く頼みますよ。床屋 (キッと男の頭を抑えて見得を切って) いやさ、一寸話してえ事があらあ。話というなあ外でもねえが、そうそう、家にゃ、ラジオも蓄音機も無えんで淋しいから、何か一つ唄いながらやろうじゃないか。お前何が好きだ？ 何でもいいから好きなものを云いな。それに合せて剃ってやろうじゃねえか。え？ 長唄か、清元か、それとも常磐津か、浪花節といくか、何が好きだよ？ 貧相な男 するってえと、親方が俺の好きな物をラジオのかわりにやって呉れると云うのかい？

床屋 そうよ。

貧相な男 そうか。そんなら、野球！ でやってお呉れ。

床屋 え？

貧相な男 野球で。

床屋 野球？ (あてが外れて考えてみて) あ、あの玉なげ、ああ野球、ああ野球か。(とがっかりしてしかめっ面をする)

貧相な男 うん、野球さ。

床屋 (かくてはならじと) 野球面白い。やるべい。なあに野球なんぞ。早慶戦って所を聞かしてやらあ。早いからよく聞いているんだぞ。(と唄い出す)

唄いながら、(又は唄に合せながら) 床屋は剃刀をその調子に合せて、剃る仕草をする。彼は全くおそるべき速力で始める。

床屋 テンは晴れたり気はすみぬ、

我等の赤旗ふりかざし、

勇み立ちたる我が選手、

フルエ、××争議団。

フレッシュヨ！ フレッシュヨ！

フレッ！ フレッ！ フレッ！

貧相な男 (頭をグラグラされて気が遠くなりかけて) ウ
ワウワウワ。

床屋 (むきになって)

フレッショ！ フレッショ！

フレッ！ フレッ！ フレッ！

それ！ (とボンと男の背中をたたく)

貧相な男 (半ば夢中で) もう、すんだのか。

床屋 当棒^{あたぼう}よー とつとと (行きやがれと云いかけて、男
がフラフラと出かけるので) とつとつと、まだいけねえ、
まだいけねえ、アツすっかり忘れちまった。もう一返
ここへかけてくんねえ。肝心な事を云うのを忘れちゃっ
たんだよ。

貧相な男 もう沢山だ。

床屋 なにひげが半分残っているよ。それじゃみっともな
くて使つて貰えねえぜ。(男を無理に引きずつて来て椅
子に腰かけさせる) お前、何が好きだ？

貧相な男 運動は嫌いだよ。

床屋 琵琶とするか。

貧相な男 琵琶は頭にひびいていけねえ、しかたねえなあ、
しみりした奴を、何か探しておくんさい。

床屋 うんめめた。新内とはどうだ。え？ 新内と芝居、

お前、左翼劇場の「太陽のない街」つてのを知ってるか。

(男かぶりをふる) 仕様がねえなあ。此の男は。それじ
や岡本文弥の左翼派新内つてのも知らねえだろうな。

(男うなずく) 駄目だなあ。まあ、いいや、それじゃ俺が
その太陽のない街を新内入りで聞かしてやるから、よく
聞いて納得するんだぜ。こう、頭の格こうを見た所じ
やお前もまんざらの馬鹿じゃねえ。骨身にこたえてよく
聞けよ。(ボーンと銅^ど羅^らが鳴る) 電気が消えた。(も一つ
ボーンと鳴る) 幕が上つたんだ。

身振り芝居をやりながら剃り始める。

新内で三味線が入ればいいが、出来ない時は、新内
の変りにみんな台詞^{せりふ}にしてもいい。

床屋 (始める)

唄「俺達は、今日までどんなにつらい思いをして闘つて
来たか、そして、君達が会社に入ったなら、俺達はどう
なる事か。それをよく話して聞かせ様と思うのだ。

台詞「そりやお前さん方だつて道楽になけなしの財布を
はたいて深川くんだからやって来たのではなからうさ。

唄「百姓は煙草をやめしと聞く、此の上に困らば何をかやめん。食うや食わずのさかい目からやって来たのにちがいない。」

貧相な男 そうだとも。

床屋 台詞「それを俺達は知りながら、何故お前さん方に帰って貰わねばならぬかと、云う事は、こりゃ俺達労働者のつとめだからだぞ。」

唄「諸君も、永い、失業で、困っている其様に、俺達も今日で七十日、闘って来て、困っているのだ。俺達は兄弟だ。お互いがお互いを助くる、これが当り前。」

台詞「所でお前さんが会社に入って仕事をすりゃ、俺達のストライキは負になる。こりゃ一体どうしたらいいんだ。」

貧相な男 俺にゃ判らねえ。

床屋 唄「俺達争議団は、皆さんが職にありつくのを、うらやんで云うのではない。邪魔するでもない。しかしながら、

台詞「これよく聞けよ。」

唄「そもそも此のストライキは、鑄造部の、三十八名鹹首から始まったのだ。俺達だって、お前はお前、俺は俺でいたならば、何も、この寒空に、空腹かかえていやし

ない。

貧相な男 (身にしみてシクシク泣き出す)

床屋 唄「だけど俺達兄弟は、俺達労働者は、それでいいだろうか。兄弟分のお前には此の道理はすぐにもわかる筈。三十八人のその為に、三千人の、人間が命を的にして、闘っている。」

台詞「此の道理がわからねえか。」

貧相な男 (考え込んでしまう)

床屋 (手を休めてその赤い上っ張りをぬぐ) みんな、眼を上げてこの、旗を、見て呉れ。此の旗は三千人の魂だ。獄中にある犠牲者も、病死した団員も、狂人になった家族の人もみんな、尊い魂が此の赤い旗の中にこもっているんだ。

貧相な男 (見ておびえる)

床屋 さあ、今云った道理がわかったか、わからねえか、はつきり云って見ろ。さあ、ここに我々の旗を置く、判らねえ奴は、此の旗を跨いで帰ってくれ。会社へ行こうとどうし様とお前の勝手だ。(と上っ張りを下に置く) やい工場へ行くなら、行つて見やがれ。(剃刀をふりかざす)

貧相な男 (考え込みながら行きかけて、途中で戻って来

る)親方「わかった。今の芝居で俺あもう、事の次第がはっきりわかったよ。俺あ、親方恥しい。もう決して××工場には行かねえよ。(と地図を細々に破る)

床屋 お前わかったのか、(涙をこすって) ああ、よくわかってくれたなあ。

貧相な男 (上っ張りを拾って) 親方旗を。

床屋 アイ。(と受け取る)

貧相な男 俺だって元は床屋の下剃りをやった事があるんで。又俺の様な裏切者が出ねえとも限らねえから、俺もこの、プ、ロ、床の分店を作ろうじゃねえか。幸い家に錆びた剃刀が小刀の代りにあらあ。なあにね、一寸は痛い方がききめが充分有りますよ。(と去る)

床屋 (見物に向って) これがプロ床の序開らきです。次には何が表われましょうか。おお、大分いそがしくなってます。

元氣な男(労働者の服装)が走って来る。床屋にとぶつかる。

床屋 (向うをすかし見て) お前つけられているな。

元氣な男 うん。おじさん頼む。

床屋 おっと、承知之助、心得たり。

元氣な男、床屋のうしろにかくれる。とすぐ傲慢な男(偉大なひげをたくわえている)がやってくる。

傲慢な男 (小走りに走って通りすぎる) はてな。たしかに此处に來たのだが。

元氣な男 (床屋に) 有難う。

床屋 一寸待ちな。今顔形を変えてやるから、此の椅子に腰かけなよ。

元氣な男 あ、あの奴、又此处へ引返して來やがった。おじさんやってくれ。

床屋 よしよし。(布ですっかり男の姿をかくして、タオルを持って来る) アツツツ。(男の顔にのつける)

傲慢な男 (返って来て) はてな。(と床屋の中のをのぞきこむ)

床屋 (しっかりとタオルをおさえて) 今日、旦那。

傲慢な男 はてな。(と退場)

床屋 (タオルを取って) だんだんと陽氣がよくなってるね。此の五月となると、(剃刀をときながら) もう万物が生き返って來ますからな。第一、一日からしてメー